

巻頭言 私にとっての生物学的精神医学会

上野 修一

愛媛大学大学院医学系研究科 精神神経科学

これまで分子生物学的基盤から精神疾患に接近する研究を続けて30余年になる。私が精神科医になった1980年代は、精神疾患の生物学的研究はまだ端緒をつかんだところであった。1990年代には遺伝子座マーカーを用いた遺伝性疾患の病因遺伝子が報告されるようになり、21世紀初頭のヒト遺伝子のドラフト配列が示されると、単一遺伝子異常による精神神経疾患の病因が次々と明らかとなった。そして、今では、全ゲノム関連解析研究が容易となり、ありふれた一般的な精神疾患の病態に近づくための分子生物学的研究は、遺伝子からオミックス解析へと研究の幅が広がってきており、精神疾患の一端が明らかになりつつある。

これらの進歩は、その他の精神科研究分野においても同様である。例えば、画像診断では、分子イメージングでは次々と新しいリガンドが作成され新たな事実が報告され、MRIでは、形態画像や機能的画像解析による精神疾患の理解の進展は、精神障害の理解のうえで目を見張るものがある。電気生理学的分野においてもしかりである。そして、これらを組み合わせ合わせた研究も盛んになっている。

このように精神疾患を、生物学的視点で多角的に解析できるようになったことは、私が精神科医となった当時には考えられなかったことである。

一方で、分子医学的な手法が高度化するに連れ、精神科医療と研究の距離が乖離してきていることは少し気になる。研究のどの分野においても、十分な症例数を集めることや最先端の技術が必要となり、加えて、適切なバイオインフォマティクスの入手やコンピューターソフトウェアを操る技能が問われるようになった。若い精神科医にとって、最新の研究方法の習得には専門的な学習が必要であり、志の高さだけではどうしようもないことで、適切な環境と精神科医以外の研究者の協力が必要である。最近、専門医教育の充実により、個々の精神科医としてのレベルが上っていることはとても望ましいが、臨床

医としての技能と研究への情熱をバランス良く進めることは、働き方改革の影響もあり、人によってはハードルが高くなってしまっているのかもしれない。結果として研究に従事する若手の精神科医が減ってしまうのではないかと心配している。将来計画委員会で行ったアンケート調査によると、研究の充実のためには、もう少し非医師の学会員に増えてほしいとの意見も多かったと聞く。研究をさらに充実させるためには、医師以外の研究者と協力し合う、包括的な研究体制が必要だと感じている会員が多いのだろう。ある程度の役割分担を行い、希望する研究がスムーズに行える体制を作っていくことにより、精神科医の研究の指向性の高まりが期待できるかもしれない。

研究内容では、ICD-11やDSM-5のような操作的診断基準により標準化した症例をまとめ解析する研究では、その病態の共通点に最短で接近できる利点があるが、一方、患者個人の持つ特性、ナラティブさが消されてしまい、臨床的に重要な要素がかき消されてしまわないかとの心配がある。前述とは逆だが、専門医制度の充実により、高い精神科の実地臨床能力を持ち、確実な臨床的視点を持った精神科医が、最先端の手法を用い解析すれば、研究の結果を十分に評価できるともいえる。若い会員が、得られた研究データを個々の症例に照らし合わせて考える十分な知識、技能をすでに獲得していると考えれば、私の思っていることは杞憂に過ぎないのだろう。

本学会の目的は、「生物学的研究を推進することにより精神医学の発展ならびに精神医療の充実に寄与する」と会則にある。我々は、近未来において、研究から得られた知見を、新しい医療として社会に還元する義務があると思う。本学会が、これからも精神医学のフロンティアとして、大いに発展していくために、私個人としても尽力したいと改めて思った次第である。